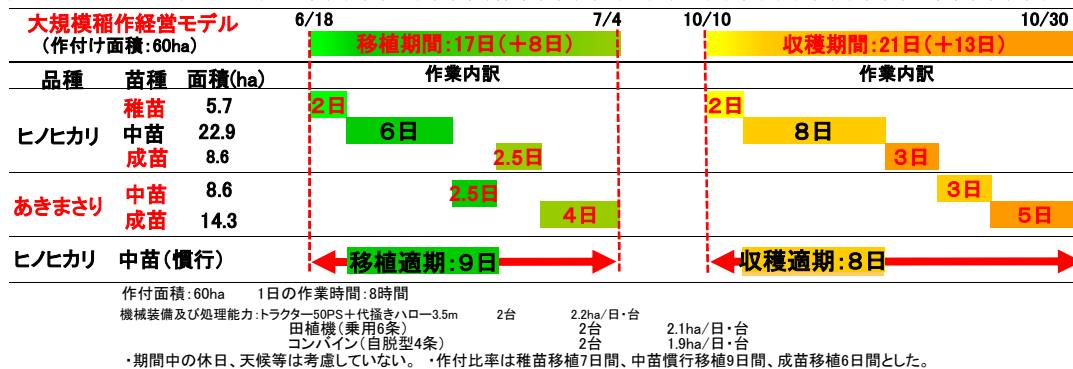


熊本県で開発した新技術

熊本県農業研究センター

2016

品種と苗の種類の組み合わせで 稲作の規模を拡大できる



問 研究のねらいは？

答 米価の低迷が続くなか、収益性を高めるためには、省力・低コスト化が重要であり、規模拡大を進める必要があります。しかし、現行の栽培体系では、機械作業時期が集中し、規模拡大の制限要因の一つとなっています。そこで、熟期の異なる「ヒノヒカリ」及び「あきまさり」と苗の種類を組み合わせることで、機械作業時期を分散できる効率的な機械利用体系を明らかにしました。

問 優れている点は？

- 答 ① 播種を同じ日に行った場合、中苗(30日苗)に加え、稚苗(20日苗)、成苗(40日苗)を組み合わせることで、移植適期期間が約20日間(6月中旬～7月上旬)に拡大するとともに、収量・品質は、苗の種類にかかわらず、概ね同等になります。
- ② 熟期の異なる「ヒノヒカリ」と「あきまさり」を組み合わせることで、慣行(6月下旬移植ヒノヒカリ)の収穫適期期間を約20日程度拡大でき、収穫の機械作業が分散されます。

問 普及するうえで注意する点は？

- 答 ① 水田苗代で育苗する苗の種類は、稚苗(乾籾180g/稚苗箱)、中苗(乾籾100g/中苗箱)、成苗(乾籾75g条播/中苗箱)です。
- ② 施肥は、LP入り複合200-D45を4kg/aを全量基肥で施用します。
- ③ 稚苗移植の場合、中苗に比べ草丈が低いため、スクミリンゴガイ生息地では、被害軽減のため田面の均平や浅水管理等に注意して下さい。